

## 一 召集兵の思い出

― 死線をこえて ―

島根県 園山俊夫

徴集年度 昭和十二年度 短身甲種合格

### 第二補充兵

私は昭和十三年九月十七日補充兵として島根県浜田の歩兵第二十一連隊留守部隊へ召集されました。私の応召時の家庭の様子といえ、

父	健在	農業
母	〃	〃
姉二人	〃	〃
本人	〃	産業組合へ勤務
妻	〃	農業
弟二人	〃	農業と学生

という状態でした。村からは同時に三人が、同一部隊

へ入隊しました。

多くの見送り人（約二百人近い）を代表して、村長さんが送別の辞を述べられ、私が三人を代表して謝辞を申しました。役場、在郷軍人会、国防婦人会、親族ら相集まり、打ち振る日の丸の旗の波と万歳々々の歓呼の声に励まされ、一死報國、生きては再び祖国の土を踏まざるの覚悟をなし、軍歌の声勇ましく駅に向かいました。

浜田へ一泊して翌日三人元気で営門を通りました。

第六中隊擲弾筒班へ編入です。

内地での新兵教育は十二月二十日までです。私は中隊No.1のハリキリボーイとして、苦しい行事、銃剣術、内務班についての教育訓練に励みました。もともと私の家では、父は篤農家の頑張り屋として近隣に聞こえ、「人に後指をさせぬように」「人の風下につくことはメンツが許さない」との家風でした。班内でも食事は人よりも早く食べて、食缶の洗浄、返納などいっつも人より早くやり通しました。

私が北支青島の中隊へ入隊したときは、四十八人が

一緒に入り、昭和十六年一月に内地に帰り復員したときはずか十五人に減っていました。戦死、戦病死、戦傷などによって沢山の減員でした。その十五人の中で最高は私ただ一人伍長に、後は兵長二人、上等兵二人ということでした。内地において私はとにかく一生懸命に頑張つて軍務に精を出しました。

三カ月の教育を終了した十二月下旬、一等兵に進められると同時に、北支の青島へ上陸し、有名な今村均將軍が師団長の部隊へ転属しました。即ち片野連隊第三大隊第十二中隊へ。

十二月、一月、二月と寒い三カ月を青島で過ごしました。作戦、討伐には出ず、専ら訓練の毎日です。手や頭は防寒被服で間に合いましたが、足は靴の中へ「トウガラシ」を入れて保温しました。私は擲弾筒班に属していましたが、行軍はきつかったです。何しろ小銃と実弾、それ以外に筒とその弾薬。片側に三発づつで前六発。その内一発は手榴弾を護身用として持ったからです。携帯口糧も多いときは一週間分くらいあった。とにかく全部で三〇キロを超す重い荷物を持っている

ので、行軍はとてもきつい。落伍することは敵にやられる自殺行為となる。いやでも落伍せぬよう付いて行く。今考えてもきついことの最高でした。この労苦に打ち勝つて人よりも良い成績を上げることができたのです。正に「苦有れば楽有り」の諺のとおり、軍隊を出てからの後の人生生活での大きな自信ともなりました。労苦をいとうては大きな損となつて返ってきます。次に、海州作戦参加です。海州とは青島より南へ約二百キロの黄海に面した港町の蓮雲港とか、有名な徐州の中間にあつた所です。江蘇省の北端です。もちろんまだ新兵で実戦の経験は何もない身分です。擲弾筒を持っていても、筒手ではなく、弾薬手として従軍しました。強い印象があるのが、寒い、雨が降る、泥んこ路の行軍というものです。以下第十二中隊誌の文を借りて述べてみます。

「降雨泥濘の悪路を昼夜連続行進、悪路との闘いであつた」

ズルズル、ベタベタ軍靴の半張革もはがれそうな泥

溇が中隊員の体力を消耗させ、夜は暗黒一寸先も見えない暗さ。前におつかつて初めて前が止まっている事がわかるという状況。数時間歩いても進んだ距離は僅かという苦しい行軍であつた。浜田連隊史にもその模様を次のように記している。

『支那大陸特有の粘土性の黄土、数日來の雨で全くお話にならない泥溇の道、一歩一歩足に力を入れて抜かないと歩けない。遂には跣足になる始末。滄雲までの約二七キロ、この夜の行軍こそ歴戦八年で第一にあげる難行軍中の難行軍であつた』と。

昭和十四年二月二十七日九時半整列、青島第二埠頭より砲艦首里丸に乗り海上機動。

二十八日午後海州沖泊地に入り上陸準備。

三月一日石船に移乗、河を逆航、十一時より小雨、寒風肌をさす。淀王莊に向かう二十三時着。

二日再び小瓮に乗り出発十六時三十分范家莊着、上陸泥溇の道を張家集に向かう十八時着。

三十日十時張家集出発。これより中隊は別動隊として連隊主力の左側を進撃。十五時南崗にて敵を攻撃五十

分の後撃退。二十一時三十分陡溝部落より急激なる射撃を受け直ちに攻撃、敵を撃滅、自動車二、小銃三〇数挺、迫撃砲數門を鹵獲、戦果あり。

四日、滄口発一八キロ行進、敵と遭遇撃退。

五日小雨。四時海州へ向い前進、八時海州着。山本支隊既に海州に進出、中隊の海州一番乗りを逸した。

十時海州の北六キロ、新浦鎮に宿営。

六日十四時半海州入城式軍司令官閔兵、十七時新浦鎮に帰る。

この海州作戦参加で私は生まれて初めて弾丸の音を聞きました。上に高い弾、近くへ来るブスブスと土地へ突き刺さる恐ろしい弾、回数を重ねると自然に判別できる。馴れと経験です。中隊の損害は兵の負傷二名。私は無事。三日の陡溝の戦闘で、敵は部落内望楼三カ所より頑強に抵抗します。また地形地物を上手に利用してくるので、なかなか手強かつたのです。

三月二十三日、警備中の中隊は海州―沂州道の要点である歡墩埠に移駐、部落掃討後宿舎に入りました。土民の言により西北一六キロに四百―五百の敵が盤居

していることを知りました。中隊の駐留は長期も予想されました。MG一小隊その他無線、行李の配属を受け、野砲兵小宮山中隊の協力があり、討伐任務が達成できたことは何よりでした。黒林鎮、沙河鎮、贛榆など三カ所に小隊を配し、いわゆる広域分散の期間もあつたのです。

駐留中の仕事は陣地構築、討伐、治安維持、宣撫、道路構築補修、忙しい厳しい討伐、警備、訓練の間にも休養、体力の維持、士気の昂揚は等閑にできないものです。私たち下級の兵隊は別として、中隊長、小隊長、その他中隊幹部は気の休まることはなかつたでしょう。私もこの海州作戦では城壁の門の上で立哨したり、物資の購入で軍票を使ったりして支那語を覚えたり、部落内で現地の支那人の生活を見聞したりで、少しずつ支那派遣軍の一員として成長して行きました。

また三月三日、陡溝部落での戦闘では自動車、小銃、砲の戦利品以外に、米、粟、鶏、煙草も入手しました。煙草は「蒋介石の慰問品」食糧は「蒋介石給与」などと称して溜飲を下げたことも思い出の一駒となつてい

ます。反面敵の遺棄死体を見たり、友軍の戦死者が出ると、暗い気持ちに胸を詰まらせました。

昭和十四年九月、海州地区より旅順へ転進。ノモンハン作戦の支援です。十日間くらい対戦車攻撃の訓練に明け暮れ、満州チチハルへ到着。チチハルでも対戦車訓練一辺倒でした。約一週間くらいで現地ノモンハンの停戦協定成立とかで、再び旅順へ戻りました。

後先になりましたが、私は昭和十四年七月一日付けで一選抜の上等兵になりました。平素よりの信念をますます固め、今後も中隊一の模範兵にと、東の空を遥拝して父母に誓いました。

チチハルより旅順へ戻つた部隊は、まず、南方の海南島へ集結。輸送船と護衛艦が六〇隻以上集まつていました。広西省欽県金鷄塘へ上陸、私は引続き第三大隊第十二中隊員として、昭和十四年十一月十六日南支に感激の第一歩を踏み入れました。

泥濘の悪路を北進二四キロ。道路は完全に破壊されています。大隊は連隊の右縦隊となり毎日降り続く雨をついて南軍へ向け敵の抵抗を排除しつつ猛攻。上陸

以来二十一日までは、特筆することもなく、所在の小敵を撃破。二十二日川幅五〇メートルの渡河点で、装具武器を頭上にして胸までの水深を裸で渡河。その後強敵の襲来、交戦により戦死六名、負傷は森本大隊長以下数名の損害を出しました。二十四日敵と遭遇交戦三時間余、戦死一名、負傷小隊長以下数名と次第に悪戦の色が濃い。この日、先遣隊第一大隊は南寧に突入占領しました。

南寧確保、残敵掃討に当たつて大隊は攻撃行動が主となります。攻撃は最大の防衛です。

以後、五塘、八塘、九塘、崑崙関と戦闘激烈を極め、戦死者多数、負傷者も数え切れず、兵力半減の惨状でありました。特に第十二中隊では将校、下士官、上等兵のほとんどがいなくなり、中隊の指揮が麻痺したので、三大隊の他の中隊より幹部を受け入れてやつと再編成するという苦境に立たされました。その上、中村旅団長、及川支隊長までが戦死という悲報さえ加わったのです。私の南寧作戦での特記事項として、思い出深い死闘苦戦でありました。

旅団長が戦死されたとき、私は、中隊が尖兵で一夜を山上で陣地確保して露営していました。その夜明け前に旅団長が敵情視察に来て、私たちの前で双眼鏡を使つていたとき、近距離よりの敵狙撃兵の小銃で腹部貫通の重傷でバツタリと倒れたらしい。約一日半くらい生きておられ、その間は各中隊より交代で担架兵を出して担送しましたが、ついに間に合わず戦死されました。

そのときの彼我の状況は、圧倒的に優勢な敵に包囲されて、弾薬も食糧も欠乏して、わずかに友軍の飛行機による空中投下で細々と補給を受けていました。空中投下も低空へくると敵の対空射撃による損害が出るので、かなり高い所から投下する。ちょうど友軍の上へ降下するか、又は敵側へ降下して口惜しがったり、百パーセントの確実性はありません。そんな状況で苦しんでいる所へ、東京の近衛兵团（飯田師団長）と台湾の独立山砲隊が支援に来てくれて、救出されました。中隊によるとほとんど全滅に近い打撃を受けた中隊もあつた由。兵力の三分の一が戦死、負傷者はもう手

が回らぬくらい。でも救援部隊のお陰で徐々に態勢を立て直しができてホッとしました。とにかく損害が多かったことが強く印象に残っています。

また、この作戦中負傷された第三大隊長の森本少佐は気骨があり、損害の予防を大切にする人物で、あるときは連隊命令を受け付けないで、攻撃に出ることを止めました。そのお陰で私たちは死なずに生き残ったのです。森本大隊長はその後の仏印進駐時の部隊長でもありました。この人について強く印象に残っているのです。

九塘、崑崙の死闘を語る山内中隊長（第三代）の著作の中に、

『元旦とはいえ、死闘を続ける部隊には食べるものはなく、一日僅かに一食の粥、弾薬も欠乏した。夜の冷え込みがひどく、夏服の中隊員は唇を紫色にして震え上がっていた。』

夜もなく、昼もなく、食もなく、弾丸もなく、服もないが、死にたくもない。（九塘六無齋）

とあり、一方では後日陸軍士官学校の防衛戦闘の戦訓として採用された「崑崙関、九塘の防衛戦闘」は浜田歩兵第二十一連隊の死闘激戦を伝える名譽ある史料となっっています。

第五師団（今村部隊）は南寧攻略戦に続く八塘、九塘、崑崙関の戦闘、賓陽作戦において、多大の戦死傷者が出ましたので、昭和十四年十二月十日応召の補充兵を、各原隊で教育訓練中であつたが、急遽本隊に増援せざるの止むなきに至りました。未熟な補充兵一、三〇六名が嚴寒積雪の浜田屯営から昭和十五年一月二十五日、広島宇品港出港、二月一日欽県へ上陸。二月の初めとは言え、南支は夏の気候です。自動車の通らない泥んこ道を、完全軍装で一週間あまりかかって南寧に着きました。第十二中隊長・山内義人中尉に、森脇正夫中尉以下一〇一名転属の申告をしました。この補充兵を南寧補充兵といいます。時に昭和十五年二月十一日（紀元節の佳き日）でした。

昭和十五年四月二十九日の生存者論功行賞では、わずか従軍三カ月未満の南寧補充兵にも勲八等瑞宝章が

与えられることになったのです。しかし損耗率も激しく、二月十一日の入隊者百名が、わずかに四カ月間に二五名減って七五名となった。さらに昭和二十一年六月十九日、名古屋港に内地帰還したとき、一緒に上陸した南寧補充兵はたったの九名であった由です。

昭和十五年八月十日、私は伍長に任官しました。同年補充兵四八人のうちただ一人私だけでした。

昭和十五年九月ころ私は第四分隊長を拝命していました。そのころ、部隊は仏印へ進駐することになっていたのですが、出発の三日前私は急に高い発熱にかかり、残留部隊に編入され、数日後には野戦病院へ後送されました。これが偶然的の病氣入院ですが、生死の分かれ目となり私は命拾いをしました。という訳は、私の小隊は大隊と共に仏印へ入ってほとんど全滅の悲運に遭って、戦友は沢山戦死、入院した私は運良く生き延びました。小隊は望楼攻撃をして、小隊長、分隊長は全滅し、兵も三分の二くらいやられたとの由。もちろん私の小隊だけでなく、大隊全般にひどい損害であったと聞きました。

私は病状思わしくなく、野戦病院からさらに広東の大きな陸軍病院へ収容され、命拾いの幸運に恵まれたわけです。元気で仏印へ行っておれば、多分死んでいたと思います。

発熱は腸チフスの保菌者というので、広東では約四十日間入院していました。その間、一週間くらいは重湯、水あめ、カステラを与えられ、水あめ、カステラは無制限に食べてよいとのことですが、そうかと言ってそんなには食べられません。次第に快方に向かい三分粥、五分、七分、全粥と向上し、回復近くは普通食です。

死神に打ち勝って広東の病院を退院し、上海のウースンへ行きました。幸運にも十二月ころに本隊もウースンへ来ましたので、難なくそこで私は原隊復帰ができてよかったです。

後は昭和十六年一月十五日、宇品港上陸、十七日、浜田屯営帰着、二十七日、召集解除復員。

自宅へ帰った後、母の話では「母は私の武運長久を祈って、毎日毎日部落の氏神様へお参りをしてくれ

た」とのこと。私の無事な凱旋も強い母性愛の賜物と知り、母への感謝はより一層深まりました。

復員後在郷では、在郷軍人会の副会長と事務長を兼任し、簡閲点呼、青年学校の訓練、応召、入営者の激励見送りと日常の産業組合の業務の隙を見て、忙しく張り切って頑張っておりました。

最後に第二回目の応召です。

昭和十九年七月十五日、戦局日増しに懐槍苛烈の度合いを加え、本土決戦の機高まるころ、再び浜田連隊へ入隊、間もなく八月一日、九州四号演習に参加しました。これは鹿児島県東海岸の内之浦のビロー島での陣地構築です。岩山へダイナマイトで穴掘りです。

次いで、昭和二十年一月七日、九州小倉の高射機関砲教育隊へ転属。連隊から十人ほど出されて、分隊長教育を受けました。輸送船に据え付けた高射機関砲の射撃教育です。飛行機が網で標的を引っ張って飛行し、下から曳光弾を使って実弾射撃をする。飛行機の速さ、距離、風向、風力などを示され、「指一本右へ、左へ」

と指示。なかなか命中しません。

教育がすむと直ぐ編成されて、輸送船に乗り組みました。ここでも私は死神にさらわれて、二名が第五師団の直属ということで、輸送船乗組みから外される幸せをつかみました。船に乗り組んだ者は全員、船が敵潜の魚雷、敵機の空爆等で海没し、一人も助からなかったとの由。母の神頼みのせいもあつたのか。紙一重の差で運命に恵まれました。

昭和二十年八月一日、終戦直前思わぬことに軍曹の階級に進みました。これが私の最終階級でした。

やがて終戦となり、私は本部勤務の都合上残務整理要員として残留し、十月十日召集解除になり復員し、元気で帰宅、母の温かい手に抱かれて重ね重ねの武運長久を感謝しました。

私の家では、私以外にも、直ぐ下の弟は終戦直後素早く復員、末弟は二十一年五月の田植え時期に、元気で復員、兄弟三人全員無事復員しましたが、父母と共に喜びあう反面、戦地で空しく散った数多くの戦友の



御霊に、何と言ってよいか御遺族の方々の前へ出るのも憚られる苦しさを味わったものです。

いずれにせよ、兄弟三人揃って元気に復員できたことは、この上ない目出度いことで、神様の、母のお陰であるから、お札の意味で氏神様へちよつとまじまつた寄付をいたしました。

現在、男三人、女二人の五人の兄弟と姉と全員健在で、長姉は米寿を日度度く迎え、年一回皆で揃って旅行を楽しんでおります。孫は内孫、外孫合わせて七人すべて健在です。以上の親族皆それぞれ努力をしてよい生活に恵まれています。

戦争は二度とあってはならないと深く考えますとともに、今日まで元気で幸せに生きていられること、有り難い極みであると、心の底から考えます。

## 中支から仏印への戦い

新潟県 渡邊賢次

私は、大正二年二月二十日、現住所で生まれ、父が自営業でしたので、六歳のころから、近くの神社横にある井戸へ水くみに行かせられるなど、家事の手伝いをさせられました。まだ、電灯がなかった時代ですから、「ランプ」の「ホヤ」の掃除も私の仕事で、「ホヤ」を割ったりしたら「げんこつ」をもらい、買いに行かせられたりしたものでした。近くの堀池で鮎釣りするにも手作りの釣竿や古い網を探して使ったりしました。

学校も小学校止まりが普通でしたが、私は親が面倒みてくれまして高等科に通わせてくれました。雪の日は当時ですから、げたか足駄でしたので、雪がくつき、時々落としながらの通学をしたものです。途中で鼻緒が切れたりすると、藁くずを拾って鼻緒をたて、学校にたどりついたこともありましたが、冬なんかは手がかじかんで困った思い出があります。

弁当のおかずも大体が納豆、油揚げ、味噌漬、たくあんと決まっていましたね。

教室には火鉢があり、ブリキ製の弁当棚に下から一